

### <論文>万葉の人びと : 「袖振る」歌より

橋本, 恭子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

39

(開始ページ / Start Page)

70

(終了ページ / End Page)

86

(発行年 / Year)

1988-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019556>

# 万葉の人びと

——「袖振る」歌より——

## 目次

- 序
- 一 袖振歌
- 二 万葉びとの袖
- 三 「振る」物
  - 『領巾振る』について
  - 『衣を振る』について
  - 『幡』について
- 四 「振る」と魂と
  - 衣振り
  - 領巾振り
  - 袖振り
- 五 結び

橋 本 恭 子

## 序

今から千年以上もの昔に詠まれた歌の数々がある。十世紀以上の年月の隔たりがあっても私たち日本人にはその意味を理解することができる。

今から千年以上もの昔に、それらの歌を詠んだ人びとがある。『万葉集』四千五百首余りの歌の世界で彼らは確かに存在し、そこで語り、恋をし、嘆いた。しかし、彼らの見聞きするもの殆ど全てが今の私たちの世界のものとは多少なりとも異なっているはずだ。逆に言えば、今私たちが目にする物の中で遠く古代から形を変えずに残っているものがどれだけ少ないか、ということだ。従って、歌の意味を知ることができても、現在の私たちの感覚でそれを理解するには限界が生じるだろう。

それらの歌が詠まれた状況をなるべく忠実に想定し歌の意味を知ろうとするなら、それを詠んだ万葉びとの目や耳、そして心を持た

なくてはならない。四千五百首余りの歌の中に生きる彼らの生活ぶり、考え方を知ることがそれだけでも大変興味深いことであり、更に歌を深く味わう上での大きな助けになるだろうと思われる。

本論では以前より疑問に感じていた「袖振る」という古の行為を中心に万葉の人びとの思想の一部を探っていきたいと考えている。

## 一 袖振歌

万葉集の中には、衣服に関係のある歌語を含む歌が五百五十首余りある(注1)。

その歌語とは「きぬ(衣)」、「ころも(衣)」、或いは「みけし(御衣)」、「かはごろも(皮衣)」、「しほやきごろも(塩焼衣)」など衣服全体を指すものから、「たもと(袂。手本とする説もある)」、「注2」、「裾」、「帯」、「紐」のように衣服の一部分を指すものまで広範囲にわたっているが、その中でも最も多く詠まれている部分は「袖」であり(一五八首…注3)、衣服関係の歌全部の中では実に三割以上の割合を占めている。

白妙の袖別るべき日を近み心にむせびねのみし泣かゆ

(巻四 六四五)

…白妙の袖さし交へてさ寝し夜や…

(巻八 一六二九)

真袖もち床うち払ひ君待つと居りし間に月かたぶきぬ

(巻十一 二六六七)

「袖別る」は離別の象徴、「袖さし交へて」は愛情の交流、「真袖もち床うち払ひ」は寢床を掃除して相手を待つ風習であろう。

袖はこのようにさまざまに詠まれているが、袖関係の歌の中でその数の多さからまず目につくのが「袖振る」という歌語である。袖振る行為を詠んだ歌——「袖振歌」は長・短歌合わせて三十三首にもものぼる(注4)。

「袖振歌」は数の多さからも目につくが、「袖振る」という行為について、何故袖を振ったりするのか、その習慣の意義を考えるうえでも興味深い存在である。

私が袖振るといふ仕種を気にかけるきっかけとなった歌は人麻呂作の

をとめらが袖ふる山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき吾は

(巻四 五〇一)

という美しい調子をもった一首である。ここでは「をとめらが袖」までが「久しき時」を導くための布留山の「ふる」の序になっており、袖振る行為を歌ったものではないのであるが、私には神々しい程に清らかな様子の古の若き乙女が山合でゆらゆらと袖を振る光景がこの歌のイメージとなってしまう。歌全体の解釈でも上三句は「久しき時ゆ」の序になっているのみで、実際の袖振る行為はこの歌のもつ意味とは関係ないといえる。従ってこの歌の詠まれた背景にどのように乙女が袖を振っている実景のなかったことはほぼ確実であるが、しかし実景とは無関係である袖が布留山の「ふる」

という音ですぐさま引き出されてくる程——言い換えれば「袖」といえば「ふる（振る）」もの、とただちに連想され得る程に、万葉の人びとの間では袖振りが広く一般に親しまれていた風習であったということが、この一首の歌から伺うことができる。

今では行なわれる事のない万葉の時代のその風俗が、人びとの間ではどのような意味・目的をもっていたのか、何故人びとは袖を振るなどということを思いついたのかを、集中の他の袖振歌から、また万葉集以外の文献も参考に、考察していきたい。

袖振る歌の中で最も広く知られているのは額田王作の

茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

(巻一 二〇)

であろう。既に天智天皇の妃となった額田王に袖を振る大海人皇子(天武天皇)を、「野守は見ずや」と柔らかく艶に非難する歌である。「紫野行き標野行き」して時折認められる額田王に対して振る袖、そして今人に見咎められては都合の悪い大海人皇子の危険な袖振は、皇子の額田王に対する慕情を示す行為と解釈されている。

戀しけば袖も振らむを武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ

(巻十四 三三七六)

この歌では「戀しけば袖も振らむを」とははっきり述べており、袖

振りが恋しい相手に対してのものであることを示している。

また

高山の峯行くししの友を多み袖振らず来ぬ忘ると思ふな

(巻十一 二四九三)

という歌では、本来なら振るべき袖を、友が多くいたため振らずにやって来てしまったが忘れた訳ではないのだと言っている。ここでは袖振りが愛情表現としてのものだけでなく、愛し合う者たちの別れに際して行なわれた通常の習慣であったことがわかる。

柿本朝臣人麻呂從石見国別妻上来時歌二首(その反歌)

石見のや高津野山の木の間に我が振る袖を妹見つらむか

(巻二 一三二)

足柄のみ坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも

右一首埼玉郡上丁藤原部等母麻呂(防人歌)

(巻二〇 四四三三)

ここでは実際、旅に出る夫が家に残る妻に袖を振る様子が描かれている。

袖振る行為について古來行なわれてきた解釈は、

・ 思う心を表わす(新考・精考など)

・ 慕う、懸想の容貌をする(古義・美夫君志など)

・恋しきに堪えずしてする古のわざ(攷證)

(以上 注5)

など大抵が二〇番、三三七六番の歌に見られるような愛情の表現としており、またそれとは少し違った

・別れを惜しむ表現(『古語大辞典』小学館)として見られる。

そうしてみると今の一三二番の人麻呂の歌、四四二三番の防人歌をはじめとして袖振歌の大半が(例外もあるが後に述べる)恋人との別離の際に歌われている事に改めて気付かされる。

その別離とは、一三二、四四二三番のように今別れつつある相手に対しての他に

### 七夕歌一首

天照らす神の御代より 安の河 中に隔てて 向ひ立ち 袖振り  
交し 息の緒に 歎かす子ら…

右、七月七日、仰見天漢、大伴宿祢家持作。

(卷十八 四二二五)

のように既に別れている相手へのものも含まれている。そしてこれら眼前の相手への袖振の他に

妹があたり吾が袖振らむ木の間より出で来る月に雲なたなびき

(雑歌 詠月 卷七 一〇八五)

白たへの袖はまゆひぬ我妹子が家のあたりを止まず振りしに

(正述「心緒」 卷十一 二六〇九)

これらの歌では「妹があたり」「我妹子が家のあたり」に見当をつけて袖を振るのであるから、「妹見つらむか」(一三三番)のように相手に袖を振って見せることを目的としない、相手を眼前にするしないうえに作者一人の袖振りである。

白浪の寄そる浜辺に別れなばいとも術なみ八遍袖振る

右一首足利郡上丁大舍人部祢麻呂(防人歌)

(卷二〇 四三七九)

これも、古く難波港での作とされているが、防人として舟上にある作者は舟上で実際に目にしているものに袖を振っているのではなく、既に家を出る時に別れて来た故郷の妻を思い浮かべているのであろう。これも一人の袖振りである。

ところが、大抵の袖振りが別離に際して行なわれるものであることは今見てきた通りだが、ここに二つの疑問が生じてくる。

第一は前にも述べたように別れの袖振りが習慣とされていたのならば、それは一体どのような目的をもつものであるのかということだが、すると同時に第二の疑問が生ずる。即ち二〇番の「紫野行き標野行き」して同じ蒲生野原で袖を振るといふ行為の説明がつかなくなってしまうのだ。この矛盾はどう説明すればよいのだろうか。

愛情表現としても、別離の際の習慣としても、それぞれ歌によって微妙にニュアンスが違う。同じ別離の歌でも別れつつある時のも

のと今別れているもの、相手に振るものと一人で振るもの…更に

八十<sup>ササ</sup>楫<sup>カ</sup>かけ島隠りなば我妹子が留<sup>とま</sup>まれと振らむ袖見えじかも

(問答歌 卷十二 三二二二)

に見える如く「留れ」と具体的な叫びを伴って単に習俗としては説明できぬものがあり、その大元の意義も果たして同一であるのかさへ疑わしくなってくる。

こうして男女間で行なわれる袖振りを見た限りでも袖振は一言で説明しきれぬ程の違いをもって表われる。が、袖振歌は男女間で歌われたものばかりではない。

袖振歌三十三首のうち今見てきたような男女間で詠まれた二十四首を除いて残りの九首の袖振りを分類してみると次のようになる。

(一) 地名などにかかる序詞で、直接の行為とは無関係と思われるもの

をとめらが袖ふる山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき吾は

(卷四 五〇一)

處女らを袖ふる山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけり吾は

(卷十一 二四一五)

我妹子や吾を忘らすな石上袖布留川の絶えむと思へや

(卷十二 三〇一三)

(二) 意識して振るのではなく、他の動作に伴い、振れるもの

舞の動きにつれて

蜻蛉<sup>あまづば</sup>羽の袖ふる妹を玉くしげ奥に思ふを見たまへ吾<sup>わが</sup>が君(注6)

(湯原王宴席歌 卷三 三七六)

手をとって遊ぶにつれて

哀世間難<sup>とどまり</sup>し往歌一首

少女<sup>おとめ</sup>らが少女さびすと唐玉を 手本<sup>たもと</sup>に纏かし或イハ此ノ句アリ

云ハク 白妙<sup>しらたの</sup>の袖振り交し 紅の赤裳<sup>あかぬい</sup>裾ひき よち子らと 手携はりて遊びけむ…

(雑歌 卷五 八〇四)

船を漕ぎ行くにつれて

敬下和遊<sup>けいげわゆう</sup>ニ覽布勢水海一賦<sup>いふ</sup>上一首

…うらぐはし 布勢の水海に 海人船に 真楫かい貫き 白楳の袖振り反し<sup>かへ</sup> 率<sup>あども</sup>ひて 吾が漕ぎ行けば…

右、據大伴宿祢池主作

(卷十七 三九九三)

(三) その他

柿本朝臣人麻呂妻死之後、泣血哀慟作歌二首(うち一首)

…玉梓の 道行く人も ひとりだに 似てし行かねば すべてをなみ 妹が名呼びて 袖ぞ振りつる

(卷二 二〇七)

①

詠ニ水江浦嶋子二一首

…玉篋 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に たなび  
き行けば 立ち走り 叫び袖振り 反則び…

(巻九 一七四〇)

②

…吾妹子に 戀ひつつ来れば 阿胡の海の 荒磯の上に 浜菜摘  
む 海人娘子らが うなげる 領巾も照るがに 手に巻ける 玉  
もゆららに 白楮の 袖振る見えつ 相思ふらしも

(雑歌 卷十三 三二四三)

(一)は最初に書いたように「袖」——「振る」の結び付きの強さを  
知ることはできても実景としての袖とは無関係である為、これらを見  
る限りでは袖振の意味は全くわからない。

(二)は、袖振る行為に何の意味もなく、それが単に美的な景物とし  
て描かれているのみである。

問題なのは(三)で、男女間の「愛情表現」或いは「別離の際の習俗」  
のどちらでも納得できない袖振りである。

①の、亡き妻に対しての袖振りは、それでもまだ今までの解釈に  
近づけて考えることも可能だが、②の浦嶋子の歌ではどうだろう。  
袖を振る対象を「海神の女」と仮定しても、箱から出た白煙に驚い  
て、走り、叫び声をあげてという仕種は奇異である。浦嶋子はその  
時一体何をどうしようとして袖を振ったのか。

③の「相思ふらしも」というのを澤瀉久孝は「あちらでも私を思

うらしいよ」、つまり海人娘子が作者を想ってのものとしているの  
だが(注7)、吾妹子に恋ひつつつけているという作者の気持ちとは  
矛盾する。ではこの場合の袖振は何に対して行なわれたものなのだ  
ろうか。

同じ袖振りの行為も歌ごとにこれほど異なった状況で行なわれて  
いる。しかし、それら全てに共通する原義があったはずである。

## 二 万葉ひとの袖

ここで、万葉の人びとの振った袖がどのようなものであったか知  
っておく必要があるだろう。

正倉院御物の「袍」などからうかがえる通り、この頃の袖は筒袖  
でしかもかなり長めに仕立てたものであった。袖先にさらに端袖を  
付けて、身ごろの左右の端の袖の付け根から先端まで七〇センチに  
も及ぶ長いものである(注8)。また文書では七一八年(養老二)  
の衣服令に、五位以上の官人の着る朝服について端袖(端袖)を加  
えて手先より長く仕立て、袖口の広さは八寸以上、一尺以下と決め  
られていたことが記されている。従って、

袖垂れていざ吾が園に驚の木傳ひ散らす梅の花見に

右一首、大和国守藤原永手朝臣 (巻十九 四二七七)

の歌に見るように手先を覆い隠すような様子であったと思われる。  
始め私は単純に、我々の着るような振袖様のものを想像していた。  
だから袖を振るといえば手を振るのにつれてゆらゆらと動くのを心

に描いていたのだが、このような筒袖状の物であるとすると、中身の手を振るにつれて袖が揺れ動くといった感じではなく、手先より長く伸びた袖をきちんと持ちかえて、意識して振り動かそうとしな  
いとこの袖は振る（振られる）という状態にはならないのである。  
そうするとこの、何かを振るといふ動作に意味があるのだろうか。

### 三 「振る」物

万葉集の中から何かを「振る」歌を抜き出してみると、既に数え  
た袖振歌三十三首の他に、九首見つけることができた（注9）。そ  
れらは何を振っているのかというと、

#### ・手を振る（一首）

みなどの葦の末葉を誰か手折りし 吾背子が振る手を見むと吾ぞ  
手折りし  
（旋頭歌 卷七 一二八八）

これは袖振歌の中の例外的なものだと思われる。

#### ・戕舸かしを振る（一首）

#### 七夕歌八首（のうち一首）

青波に袖さへぬれて漕ぐ船の戕舸振る程にさ夜更けなむか

右、大伴宿祢家持獨仰天漢作之 （卷二〇 四三三三）

戕舸とは船を漕ぐための材で、この歌は船をつなぐのに戕舸を打  
ち立てるといふ意味であり、ここで問題にしている振り動かすとい

う行為とは全く別のものとしてよいだろう。

そして、以上二首の他は全て「領巾」を振る歌である。

#### ◇『領巾振る』について

領巾とはこの頃の女性の装身具の一つで、細長い薄布——主とし  
て羅、紗などの素材——を首に掛けて肩から長く前に垂らしたもの  
である（注10）。薬師寺の「吉祥天女画像」や正倉院の「鳥毛立女  
屏風」でその着装の様子を知ることができる。

集中七首の領巾振る歌は一首を除いた全てが松浦佐用姫まつらさよひめの伝説を  
題材にしたものである。

…宣化天皇の朝（六三五～六三九年）に朝鮮半島で新羅が任那を  
侵したので大伴狭手彦を遣わしてこれを鎮まらせた。その狭手彦が  
唐津湾から船を出す際に佐用姫が別れを惜しんで山に上って領巾を  
振り、悲しみのあまりそこで遂に石に化したという言い伝えがそれ  
である。それを詠んだ

松浦縣がた佐用姫の子が領巾振りし山の名のみや聞きつつをらむ

（卷五 八六八）

行く船を振り留みかね如何ばかり戀しくありけむ松浦佐用姫

（卷五 八七五）

卷五に収められた一連の歌であるが、この万葉の時代に既に伝説  
として扱われている領巾振りなのだから、これはもっと古い時代に

盛んに行なわれたものだったのでないかと思われる。領巾振る歌のあと一首は

見渡せば近き里みをたもとほり今ぞ吾が来る領巾振りし野に

(羈旅歌 卷七 一二四三)

「出かける時に妻が別れを惜しんで領巾振った野に」(注11)というのであるから万葉の時代の人びとがまるで領巾振りを行なわなかった訳ではないのだが、他の領巾振る歌全てが伝説に題材をとっていること、——またここで注意しておきたいのは領巾振りが大半の袖振歌での袖振りと全く変わりにくく行なわれていることで、それにもかかわらず万葉の時代は領巾よりも袖を振る方が一般的であるらしいことなどから、領巾振りは袖振りより古い習俗であるらしいことが分かる。

そこで万葉集以前の文献に現われる領巾について見ていくと、まず『風土記』に松浦佐用姫伝説と同類のものが記されている(なおこの場合は弟日姫子)。

褶振の峯 郡の東にあり。烽の処の名を褶振の烽といふ。大伴の狭手の連、発船して任那に渡りし時、弟日姫子、此に登りて、褶を用ちて振り招きき。因りて褶振の峯と名付く。

(『肥前國風土記』松浦郡 注12)

しかしこの場合の領巾振りは袖振りの解釈と同じものであろう。

が、もう少し古い文献によると、領巾そのものに不思議な力があると信じられていたらしいことがわかる。

一つはよく知られている『古事記』中の大國主命の話である。

…故、詔りたまひし命の隨に、須佐之男命の御所に參到れば、其の女須勢理毘賣出でて見て、目合爲て 相婚ひたまひて、還り入りて、其の父に白ししく、「甚麗しき神、來ましつ。」とまをしき。爾に其の大神出でて見て、「此は葦原色許男と謂ふぞ。」と告りたまひて、即ち喚び入れて、其の蛇の室に寝しめたまひき。是に其の妻須勢理毘賣命、蛇の比禮二字は音を以るよを其の夫に授けて云りたまひしく、「其の蛇昨はむとせば、此の比禮を三たび擧りて打ち撥ひたまへ。」とのりたまひき。故、教の如せしかば、蛇自ら静まりき。亦來る日の夜は、吳公と蜂との室に入れたまひしを、且吳公蜂の比禮を授けて、先の如教へたまひき。故、平く出でたまひき。…

(『古事記』上卷)

須勢理毘賣の授けた比禮(＝領巾)は、蛇や吳公、蜂を鎮まらせる効果を持った、いわゆる呪具であった。その他領巾の呪力としては、浪風を自由に操る力が信じられていた。

…又昔、新羅の國主の子有りき。名は天之日矛と謂ひき。是の人參渡り來つ。(略)其の天之日矛の持ち渡り來し物は、玉津寶と云ひて、珠二貫。又浪振る比禮、比禮の二字は音を用るよ。下はこれに效へ。浪切る比禮、風振る比禮、風切る比禮。又奥津鏡、邊津鏡、并せて、八種

なり。

〔古事記〕中巻

万葉集より前のこの時代に於いて、領巾は単なる装身具ではない。後の天之日矛の話から、その頃は珠や鏡などと並んで呪力をもつ宝物のひとつに数えられていて、それを身に付けるといった記述もないし、少なくとも初めから身を飾ることが目的だったのではないと思われる。

領巾にはもともとは特殊な力があると信じられていたことはわかったが、しかしただの布切れでしかない領巾が、何故呪物になり得たのかということ、同時に何故それを振らねばならなかったのかは、まだこれだけではわからない。

#### ◇『衣を振る』について

そこで万葉集からは離れるが、袖・領巾以外に「振られるもの」を探してみると、衣服全体を振るという記述が見つかった。

ひとつは「魂呼び」という、民間の風習である。

出産や急病で臨終になった場合の蘇生呪法（魂呼び）として、屋根の上に乗って病人の常用していた衣服を翻すという風習のみられる地方がいくつでもあるという（注13）。

もうひとつは祭礼儀式の一環として行なわれるものだが、

「女官藏人開御衣管振動」…鎮魂祭（注14）

「神祇官彈御琴、女官被御衣管振之」…八十嶋祭（注15）

両方とも、女官が御衣（天皇のお召し物）の管を開いて振り動かすというのである。八十嶋祭についてはその本義が今ひとつ明らかでないため、鎮魂祭についてみていくが、この鎮魂祭は『日本書紀』巻二十九に天武十四年十一月丙寅（二十四日）に「是日、爲天皇招魂之」とあるのが宮廷記録に於ける初見で、生者の魂を活着させる目的で行なわれた儀式である。「爲天皇」というのはつまり「群臣から天子様に魂を差し上げる」（注16）ということ、毎年天皇に新しい魂を附着させる儀式なのであった。

この鎮魂祭にしても前の魂呼びにしても、魂と衣服を振ることとの関係が注目される。即ち、魂に関する儀式の一部に衣服を振る行為が含まれているのだから、衣振りも魂に何か関係あるのではなにかと思っただのである。

では、「魂」に注目して衣振りを考えてみることにする。

まず、古代の人びとは「魂」をどのように考えていたのか。よく知られているのは、言語という実体のない物にも魂があるとすると霊信仰であるが、その他にも『日本書紀』に「得化を弘めて、含靈に覃みよび被かよらしむることを思ふ」（推古十六年の条）とあることなどから、人間の内に魂があるとすればそれをよるずのものに押し及ぼし、山川草木にも動物にもそれが内在して生命の源泉をなすと考えたらしいことがわかる（注17）。

更に人間の魂に限っていえば古代人は、

「靈魂は肉体と離れた別個の存在であると信じていたやうである。而して靈魂が現身に宿つてゐる間は人間は生存することが出

来るが、此れが永久に現身を離れ去る時は、即ち死の状態に變ると考へたのである。(死者の靈魂は肉体を離れた後は天翔つていと考へ、これを招いて慰めるのが祭祀である)次に他の一面に於いてはまた靈魂は普通現身に宿つてゐるものであるけれども、時としてはこれが一時的に現身から遊離することがあるといふ信念を有していた」(注18)

という。

また、西角井正慶も説くようにこの頃の人々は「後々の人が死後の靈魂といった靈魂ばかり考えているのと違い、肉体に去来する靈魂を考え」、「その靈魂を来触させることができると考えていた」(注19)。そこで先程の鎮魂祭のような儀式が生まれたのである。

こうして魂について調べているうち、「たまふる」という語に出くわした。衣や領巾、袖を振る「ふる」とは離れたものではあるのだが。

「鎮魂」と書いて「たまふり」或いは「たましづめ」と読む。これは折口信夫が

「まづ魂を附着させるというのが極古い意味で次には字義どおり自分の体にある魂を外部に遊離させないやうにずっと鎮めておくといふ意味になる。この二つがだんだん信仰上の混乱を来して外から魂を附着せしめる信仰と、内にある魂を發散させないといふ意味を含めて鎮魂といひ、前者をたまふり、後者をたましづめと云つた」(注20)

と説いている通りである。

それでは何故衣を振ることが鎮魂につながるのであらうか。外部の魂を附着させるにあたっては、宙に漂う魂を、衣でかき寄せることでこちら側に向かわせるといふ考えだろうか。いやそれでも、招き寄せる動作と振り動かすのではまるで異なる。

一方、振られる衣については、衣服に関する信仰があったことが知られている。一旦身に付けた物にその人の魂が着くという思想は集中にも多く見られる。

湯原王亦贈歌二首(うち一首)

わが衣形見に奉る敷栲の枕を離けず巻きてさ寝ませ

(巻四 六三六)

娘子復贈詩一首

わが背子が形見の衣妻問にわが身は離けじ言問はずとも

(巻四 六三七)

(※着物はものを言はぬから物足りないがそれでもあなたの下さつたものと思つて肌身離さず着ていることにします)

一度身につけた物には身体から離れたあともその接触が消えないで残る。従つて相手の衣を身につけることは相手の肌と直接触れているのと同じことである。着る者の魂がつく為である(注21)。

筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着欲しも

(東歌 卷十四 三三五〇)

海邊にして月を望みて作る歌九首（より一首）

夕されば秋風寒し吾妹子が解き洗ひ衣行きて早よ着む

（卷十五 三六六六）

麻の粗末な着物でも、妻の着古した「解き洗ひ衣」でも肌につけていたいというのは、伝染呪術によって衣から妻の愛情・ぬくもりを感じる事ができるからである。

また柳田国男によると（注22）中国から四国にかけて「袖モギ」という地名が多くあり、そこで転ぶと片袖をとって棄てねばならず阿波には「袖モギ様」という神を祀った例もあってそこでは転ばなくとも片袖をとって祭らねばならぬという。ここでいう袖は衣服全体の簡略化である。即ち、古代の人々は行路人の死を恐れ、その死霊の荒ぶを防ぐ為に衣をかけてやったという（注23）、これも衣に対して何かの力を信じた例である。

このように、着る者の魂がついた衣を神聖な、呪力のあるものと見なす考えが古代人であったことがわかった。そして前に見たように、衣振りに魂と関係する何らかの呪力が信じられていたらしい。ではその二つをどう結びつけたらよいのか。「袖モギ」の例と同様に、袖振りは衣振りの単に簡略された形なのか。

今まで「振られているもの」を袖、領巾、衣、と見てきたが、それらの振られる状況、目的は各々異なっていた。しかし、三つの「振られるもの」に共通したことがある。袖も領巾も衣も、全てが布でできたもの——ひらひらと風に靡き、翻すことのできる形態で

あるということだ。

万葉集には他に戕刑・手を振るといった歌があるがそれは先に述べたように例外的なものなので、あとはみな、風に揺らぐ布状のものを振っていることになる。

とすると、振るものは具体的にはどんなものでもよかったのか。布であれば何を振ってもよかつたのだろうか。

ここにまた、布状のものに関する記述が見つかった。『肥前風土記』基肆の郡姫社の郷に伝わる、「幡」の話である。

#### ◇『幡』について

姫社の郷 此の郷の中に川あり、名を山道川といふ。其の源は郡の北の山より出で、南に流れて御井の大川に会ふ。昔者、此の川の西に荒ぶる神ありて、路行く人、多に殺害され、半ば凌ぎ、半ば殺にき。時に、崇る由を卜へ求ぐに、兆へけらく、「筑前の國宗像の郡の人、珂是古をして、吾が社を祭らしめよ。若し願に合はば、荒ぶる心を起さじ」といへば、珂是古を覓ぎて、神の社を祭らしめき。珂是古、即ち、幡を捧げて祈禱みて云ひしく、「誠に吾が祀を欲するならば、此の幡、風の順に飛び往きて、吾を願りする神の邊に墮ちよ」といひて、便即て幡を擧げて、風の順に放ち遣りき。時に、其の幡、飛び往きて、御原の郡の姫社の社に墮ち、更還り飛び来て、此の山道川の邊に落ちき。此に因りて珂是古自ら神の存す處を知りき。（略）即て社を立てて祭りき。爾より已来、路行く人殺害されず。

ここでは今まで問題にしてきた「振る」という行為はあらわれな  
いが、袖、衣、領巾と同様に布状のものを風にさらすということ、  
またそれに或る力を信じた点が共通しているため取り上げた。

先程「たまふり」「たましづめ」など魂の遊離について触れたが、  
空中に浮遊する魂への信仰と、その魂が漂う空气中に布を翻すとい  
う事が深いつながりを持っているように思えてならない。今の幡の  
例では「風の順に飛んでおのずと神の在ます処に落ちた」というが、  
その幡を運んだ風こそ空中の魂の流れそのものであり、言い換えれ  
ばそれら魂が幡を導いたということにならないだろうか。

魂というのは目に見えぬものである。目に見えぬから、それが何  
かを動かすことで存在を知ると考える。今の私たちでも怪談話など  
している最中にカーテンが揺れたり、ろうそくの火がゆらいだりす  
ると、目に見えぬ靈魂の存在を急に意識し、「今、そこに来ている」  
といて震えあがる。

#### 集中の

一書曰、近江天皇、聖孳不豫御病急時、太后奉献御歌一首

青旗の木旗の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも

(挽歌 卷二 一四八)

青旗を葬具の一種と考えるとこの歌は葬礼の時の描写である(注  
24)。

この歌で旗の上を「通ふ」のは天皇の魂である。それを「目には  
見れども」といっているのは、魂を直接見ているのではなく、旗が

揺れるのを見てのことである。即ち旗の靡きに靈魂の遊離を感じた  
のである。旗の上に今通ふ天皇の御魂は、多分生前行なわれたで  
あろう鎮魂——この場合「魂呼び」的——のまじないで帰って  
来なかった。従って天皇は「死」に到り、帰って来ない、肉体によ  
りつかない魂が浮遊しているのが見える、ということであろう。

「ひらひらした物」が揺れば、その時、そこには魂が降りてい  
ることになる。そこから「ひらひらした物」が一種の神秘性を帯び  
たものとなり、更にそれが「魂の憑り所」と考えられるようにな  
ったとするのはどうだろう。魂の憑りつく所、つまり、降臨の目印  
となる「ひらひらした物」を、魂がよりつき易いように、より目立  
つように振り動かした、これが、布状のものを振ることの原義なの  
ではないか。

#### 四 「振る」と魂と

ここからは全く私の推測となるが、以上のように仮定すると、今  
までの疑問に一応の納得のいく説明付けをすることが可能になる。

今一度、衣振り、領巾振りを振り返って、袖振りを考えてみるこ  
とにする。

#### ◆衣振り

まず鎮魂祭についても一度詳しい説明が必要であると思われる。  
る。

「昔は天子様の御身体は魂の容れ物であると考へられていた。天

子様の御身体のことを、すめみまのみこと申し上げて居た。みまは本来、肉体を申し上げる名称で、御身体ということである。尊い御子孫の意味であるとされたのは後の考へ方である。すめは神聖を表す詞ですめ神のすめと同様である。すめ神の申す神様は何も別に皇室に關係のある神ではない。単に神聖といふ意味である。此非常な敬語が、天子様や皇族の方を専、申し上げる様になつてきたのである。此すめみまの命に天皇靈が這入つて、そこで天子様はえらい御方とられるのである。(略)此すめみまの命である御身体、即肉体は生死があるが、此肉体を充す処の魂は終始一貫して不変である。故に譬ひ肉体は變つても、此魂が這入ると全く同一な天子様になるのである。」

「昔の人は魂は一年間活動するともう疲れて役に立たなくなる、と考へていたから毎年(鎮魂祭を)やるのである。毎年々々、新しく復活して来ねばならぬ、と考へて居たからである。」

と折口信夫が説くように(注25)、天皇が天皇であるために天皇靈を招いて、天皇の御身体に附着させようとしたのである。

鎮魂祭では「琴師弾和琴」するのをバックに「開御衣管振動」ということが行なわれたのであるが、神や靈魂を招き寄せるためにはそのような単調な弦の響きが必要だったのであり(注26)、そうして近くに招いた魂を、玉体の代わりである御衣に憑りつかせようとしたのであろう。

信州諏訪神社上社の大祝は就任の儀式で、「神衣」をつけると同時に諏訪大明神の御身体そのものになると信じられていた(注27)。

これと同じく天皇の体を包む御衣は玉体の象徴であり宗教的にも深い意味があると考えられたのであろう。

ただ、前の「ひらひらする物」という定義に「御衣管」は当てはまらないが、しかしまさか天皇のお召し物を群臣が手でつかんでバサバサ振り回すなどという失礼なこととはできないだろうから、管に入れたままで振つたのであろう。衣に対する信仰から考えても、それだけで充分、魂の憑り代としての効果はあると考えられたのだらう。

民間信仰の魂呼びはそれに比べれば直接的で本義に忠実なやり方である。この場合、衣に憑りつかせるのは、今遊離している病人の魂である(↓魂がしっかり体に納まっていなため病氣になつていたのか)。当人の身代わりに衣を振つて、そこに魂を再び納まらせ、病人に活氣を与えようとしたのだらう。病人が死亡した場合は、遊離した魂がそのまま帰つて来なかつたということになつたのだと思う。

#### ◆衣振り

まず、蛇や蜂を鎮めたり風浪を操ることのできる、呪力を持つ領巾であるが、『旧事本紀』には饒速日命が地上に天降る際、天神から授けられた十種の瑞宝みづたまの中に「蛇比禮」「蜂比禮」が入っていることが記されている。

これは、領巾を振ることで神靈が招かれ、その神靈の力によって蛇靈、蜂靈が鎮まるといふ信念によるものだったのでないか。後に領巾はそういった呪物としての進行が薄れて装身具的な要素のみ

色濃く出るようになったが、しかしそれでも今でいう「お守り」のような、その程度の信仰は残っていたのだろう。また、衣に比べて最初から呪物として、振られることが目的で発生したのであるとも注目すべきである。

次に夫を慕って松浦佐用姫が振った領巾の意味であるが、ここでは招鎮の本来の意味はかなり薄れているようである。呪物、お守りである領巾の力で、夫を留まらせようとしたのである。が、この背景にはやはり魂の憑り代としての神秘的な領巾への信仰が存在している。

#### ◆袖振り

次に問題の袖である。

袖を振る事に関しては、振られる袖に意味があるのか、又は袖を振るといふ動作自体が意味をもつものなのか前には疑問であったが、衣への信仰が明らかになった今、その一部である袖もその点全く無意味ではないということは言える。行路病者の死霊を慰める為衣服をかけてやるのが後に袖だけに簡略化されたのにそれが伺える。

しかも魂の憑り所としての定義「ひらひらするもの」に、当時の人びとの着ていた筒袖の形が当てはまるのである。振り動かすのに最も都合の良い、中国伝来の垂れるような長袖は、振ることだけを目的とした領巾の代わりに容易になり得たのであろう。

そこでまず別れの際に振る袖であるが、当時の長く、危険の多い旅に際しての別れを考えた時、離れている間の相手の無事を祈るた

め、神霊の加護を願ってそれを招くための袖振りが行なわれるのが習慣となったものであろう。それが

高山の峯行くししの友を多み袖振らず来ぬ忘ると思ふな

(巻十一 二四九三)

のように「振るべき袖を振らなかったが忘れたのではないのだ」という歌が歌われるようになり、そのうち袖を振るのは愛し合う者たちにとっては当然の行為となって、袖振り＝愛情表現のような解釈となっていくのだらう。だから別れてしまっている相手に対しても袖振りは行なわれたのである。

また同時に、

八十楫かけ島隠りなば吾妹子が留れと振らむ袖見えじかも

(巻十二 三二二二)

のように「留まれ」という願いを伴った袖振りには、魂を招く意図がみえる。去って行く夫の魂だけでもこちらに呼び寄せられないかと、そのような想いで袖振りであらう。

冬十二月大宰帥大伴卿上京時娘子作歌二首(うち一首)

大和道は雲隠りたり然れども吾が振る袖を無礼しと思ふな

(巻六 九六六)

何故この袖振りが「無礼」なのかというと、身分の高い人の魂をこちらに招くということが恐れおおいのである。しかし恋しさゆえですから無礼と想うて下さるなどというのだ。

別れの袖振りのこのような面が、多少ニュアンスを変えながらも受け継がれたのでありその本義は共通のものである。

茜さす紫野行き標野行き野守りは見ずや君が袖振る

(巻一 二〇)

本義が魂を招くという重大なものだけにその愛の想いも深刻である。この二〇番の歌もそう考えることによってはじめて納得できる。そして更に先程の、通り一遍の解釈では意味のとれなかった三首の袖振歌にも、そうした見地からの解釈を行なうことによって納得のいく解釈をすることができるといえる。

⊖ …玉梓の 道行く人も ひとりだに 似てし行かねば すべて  
なみ 妹が名呼びて 袖ぞ振りつる (巻二 二〇七)

この世には妻に似た人の姿さえなく心が慰められることもない。そこで「せんすべもなく名を呼んで袖を振った」というのは妻の靈魂への直接のはたらきかけ、即ち招魂ではないのか。生前妻がいつも出ていた軽の市で袖を振るといふのは、そこに漂う魂の存在を信じたからであろう。

⊖ …玉篋 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に たな  
びき行けば 立ち走り 叫び袖振り 反則び… (巻九 一七四〇)

水江の浦嶋子を詠んだこの歌は、更に次のように続く。

…足ずりしつゝ たちまちに 心消失せぬ 若かりし はだも皺  
みぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは いきさへ絶へて 後  
遂に 命死にける 水の江の 浦嶋が子が 家処見ゆ

みるみるうちに老いて死につつある浦嶋は、将に自分の、常世辺に去って行く魂を呼びとめようと、転びながら走り、叫び、招魂の袖振りをしたのである。

⊖ …海人娘子らが うなげる 領巾も照るがに 手に巻ける 玉  
もゆららに 白梶の 袖振る見えつ 相思ふらしも (巻十三 三二四三)

先程も述べたように、作者と海人娘子のことを「相思ふ」と言ったのだとするのは、吾妹子に恋い続けてきた作者の気持ちと矛盾する。かといって海人娘子同士が「相思」って袖を振っているとするのも奇妙なことで、そこで中西進は、「しかも通常の海人の少女が光るような領巾をかけ、ゆららに鳴る玉を手に巻き持っているのが普通でないとするれば、この処女らは海人の出漁において、その招魂

をおこなう一団の処女らであったのではないか」としており（注28）、私もそれに賛成する。「相思ふらしも」という言葉も、出漁する海人と、袖振る海人処女とのことだとすれば、すんなりと意味が通じる。

従って、意識して袖を振り動かす類の袖振る行為には全て、招魂の立場からの理由づけができたことになる。

## 五 結び

以上、衣、領巾、幡を振る例を参考にしつつ万葉の人びとの袖振りを考えてきたが、結論を先に述べてしまうと、それは魂の憑り代として風に靡く布状のものが振られたのが原義であり、集中の袖振り（意識して振るもの）も全てがそれに基づくものと考えることができた。

魂の降臨の際目印となるよう何かを振るといことが行なわれたのであるから、振る物は本当は何でもよいはずである。しかしやはり振られる物にもそれなりの呪力がなければならず、呪物専用の領巾をはじめ、衣も袖も例外ではなかった。

万葉集での袖振りは、その元々の意味「招魂」に従って忠実に行なわれたものは最後に説明した三首のみであり、残りはそこから第二次的な意味を持つようになったものである。

万葉の時代の袖振りを考える時、実際はそれよりもっと前の時代に逆のばらなければならなかったのであるが、呪具である領巾が装身具となったのと同様、袖振りが「蜻蛉羽の袖振る」と歌われ、ま

た「をとめらが袖振る」と美しいイメージをもつように、長めの袖を、愛する人に向かって振る様子の美しさが、万葉の人びとに好まれ、親しまれたのであろうことがうかがえるのである。

## 注及び参考文献

- 1 小川安朗『万葉集の服飾文化 下』による。
- 2 澤瀉久孝『萬葉集注釈』では「たもと」を衣服の部分としてよ  
り、「手本」の意に解している。
- 3 1の、衣服の細目区分表による。ただし「衣手」もその中に数  
えられている。
- 4 澤瀉久孝『萬葉集注釈—索引篇』を参考にした。
- 5 島田啓子「萬葉集に於ける習俗の研究—袖振歌考—」（東  
京女子大『日本文学』第五巻）より引用。なお、書名の略号は  
次の通りである。  
新考：万葉集新考（井上通泰）  
精考：万葉集精考（菊池寿人）  
古義：万葉集古義（鹿持雅澄）  
美夫君志：万葉集美夫君志（木村正辞）  
攷證：万葉集攷證（岸本由豆流）
- 6 澤瀉久孝『萬葉集注釈』に「袖振る」は（略）必ずしも舞ふ  
事に限らないが、ここは槻乃落葉（荒木田久老）に「舞せるに  
や」とあるのに従ふべきであらう。攷證に『其席にありて取ま

かなふとて立ありくが、袖のなよ／＼として、ありくにしたが  
ひて振などするを賞していへるにて』とあるは、近世の所謂振  
袖ならばさうも考へられやうが、上代の袖は筒袖であるから今  
の袂のやうに自然に振れるといふものでもなく(略)やはり舞  
の袖とみるべきであらう』とあるのに従った。

7 『萬葉集注釈』による。

8 1に同じ。

9 4に同じ。

10 稻岡耕二・橋本達雄編『萬葉の歌ことば辞典』による。

11 7に同じ。

12 表記は岩波の『日本古典文学大系』に従った。

13 井乃口章次「魂呼び」(『民俗学研究』第三 一九五二年)

14 岡田精司「即位儀礼としての八十嶋祭」引用の『江家次第』

より。(『古代王権の祭祀と神話』)

15 14に同じ。

16 折口信夫『古代研究—民俗学篇—』より。

17 松原博一「万葉におけるカミ(神)意識の性格」(『万葉の精神  
構造』)の引用文より。

18 次田潤「祝詞新講」より。

19 西角井正慶「鎮魂歌集としての『万葉集』」(『古代文芸と民俗』

— 民俗文学講座IV)による。

20 折口信夫『折口信夫全集 第九卷』より。

21 フレイザーのいう伝染呪術である。

22 西村真次「コホロギ橋と袖モギさん」(『生活と民俗』)より引

用。

23 22に同じ。

24 今井福治郎「祭と万葉集——旗を中心として」(『和洋国文研  
究』第五号 一九六七年六月)に、

「黒坂の命の葬りの車、黒前の山より出でて、日高見の国

に到り、葬具儀の赤旗と青旗と、交りひるがへりて…(後略)』

(『常陸国風土記』信太郡条より)

この一節によると、赤旗と青旗とは葬具として使はれたこと

が明確である」

とあるのに従った。

25 16に同じ。

26 14に同じ。

27 14に同じ。

28 中西進「呪と美と——『袖振る』をめぐって」(『成城萬葉』第  
六号)

### その他の参考文献

尾崎富義 「『袖振』歌考」(『上代文学』二十九号 一九七一年)

折口信夫 『折口信夫全集』第六卷

金子武雄 『上代の呪的信仰』

桜井 満 「万葉集と民俗学」

佐藤文義 「『多麻布礼』考」(『万葉集の伝承と創造』)

武田正弘 「タマフリ儀礼と神話」(『国文学解釈と鑑賞』一九七七

年十月)